

歴史

割られていた孔子廟碑

二千五百年ほど前、中国の春秋時代の末期に、魯ろという小国の曲阜きょくふという邑むらに孔丘こうきゅうという人物が生まれた。世に云う、世界の四大聖人の一人として挙げられる「孔子」である。孔子については諸説があり、また、ここでは詳細を述べる場面でもないと思うが、中国に「文化大革命」の嵐が吹き荒れた数年後、私はその曲阜を訪ねたことがある。この地を選んだのは、孔子という人物についての興味、曲阜の雰囲気、最も見たかったものは孔子廟の碑であった。

中国のみならず、わが国の思想や政治にも影響を及ぼし信仰の対象にさえなったその廟碑が、驚いたことに二つに割られていたのである。孔子の生家も迫害を受けたというが、孔子から七十四代目の子孫は台湾に避難していて無事だったそうである。始祖何代目云々はわが国にもよくある逸話であるが、これに反論する材料が無い限りすべて信用するしかない。

孔子廟を割ったのは、不特定多数の都会から来た若者たちだったという。文化大革命は、大衆を直接に指導することを目的として元「毛沢東主席」が「劉少奇」等を、右傾の反革命者として隔離し、

持論の社会主義を改めて唱導したものであった。その極左的思想が、鬱積した不満と無知を巻き込んで潮流となり、中国全土を荒れ狂い、不毛の革命に暴徒化したものである。間もなく毛主席は亡くなり、四人組が失脚、その後「鄧小平」の改革・開放政策によって急速な経済発展を遂げ、世界を驚かせたことは周知の事実である。しかし、この変化は文化大革命の反省と反作用でもあり、この形態は共産党一党独裁を部分的に修正した資本主義の導入でもあった。情報社会はすでに世界をネットで繋いでしまっていたのだ。

文物は、「古典」というだけで価値が生まれるものではない。その真価は、中味の重さが理解され、あらゆる時代の評価に耐え得る必要があるからである。私は長い間、価値とは人間が共有できる基準の一部であると考えてきた。ところが、その価値がいとも安易に変わってしまい、一方的に破棄されると、常識そのものが揺らぎ方向が見えなくなってしまう。

なまかしり

生嚙の中国の近々代史を私が述べても始まらないが、一つだけ、毛主席の一声で中国が失ったものを指摘したい。二千年以上にわたって使用されてきた始皇帝が制定した漢字秦の始皇帝在位B・C二四七〜B・C二二一年を略字体に改めてしまったことである。漢文

の初学者は清の聖祖「康熙辞典」にあたる略字体は便利かも知れなかったが、中国史は四千年ともいわれる歴史のすべてが漢字で記されているのである。十五年後、再度北京を訪れた時、すでに一部の学者を除いて、古文書が読めない若者が多くなったとの嘆きを耳にした。話し言葉は北京語と上海語ではなかなか通じない。沿岸部と内陸部の少数民族との会話には通訳が要る。現代ではテレビやパソコン等の普及によって私が見知った世界とは違ったものになっているかも知れないが・・・)

ところで、文字に限らず孔子の思想も、すべての時代に万能であったわけではない。秦の始皇帝の時代には焚書坑儒の迫害を受け、思想そのものがこの世から消えかかったこともある。「儒教」は官僚組織を骨格として前世代の習慣を守り、当時の乱世を正そうとしたことから始まる。時代が変化して王権の独裁政治が行われるようになる。と為政者にとっては旧い習慣は邪魔な陋習ろうしゅうでしかなくなる。つまり、論語は薬にも毒にもなる思想だったのである。

論語という書物をあらためて読み返してみた。全編は「仁」という思いやりの思想に貫かれており、基本軸に「礼」が据えられている。孔子のいう「礼」は、「人の道」を形にしたもので、「礼」はそ

の規範の揺れを防ぐ為のものであった。やがてそれは「仁」として完成し、誰もが身につけなければならないものとして定着する。「論語」に残された文言は、もんごん 実に人間的である。だからこそ、孔子は「神」にならなかったのだろう。そもそも「神」とあが 崇められた人は書物を残していない。釈尊、キリスト、ソクラテス然りである。孔子の「論語」は孫弟子たちの伝聞を集めたものである。

二回目の訪中の時、北京博物館に行った。新たに発見されたという「論語」の竹簡ちくかんが宝物のようにガラス箱に収められ展示されていた。このありさまを見て、この国の歴史は幾度か異民族によって中断しているのです、価値観の変化にも慣れているのかも知れないと思ったが、孔子の評価が十五年間でかくも変わるものかと驚くばかりであった。原初の「論語」は、心ある人の手によって始皇帝の時代に壁土に塗り込められ、今日に残ったものと伝えられている。かべつち

唐突だが、あるテレビ局で放送記者が「日本に今、外国人が攻めて来たら、あなたはどのような行動を採りますか」の質問に、若い女性の「逃げる！」は論外としても、ある男性の「こんな国、護る価値がありますかね？」の答えには驚かされた。明らかに、私の価値と変わっているのである。価値観は時代と共に変化することは認

めるとしても、明治維新から百四十年、時代の激変とは云え、明治の元勲には耳に入れたくない言葉ではある。一方孔子は自分の理想が入れられなかった時にも、国を捨てようとはせず、理想を後世に託し教育者として生きたのである。

私たちは、この国で生まれこの国に生きているから日本人なのではない。遠い昔から日本文化と繋がって生きてきたから日本人なのである。「こんな国、護る価値がありますかね？」と忘れた彼には、文化の意味をもう一度考えてもらいたい。文化は民度と比例する。つまり、文化とはその国の風土が永い時間をかけて練り上げてきた知恵の結実なのである。

私は割られていた孔子廟を思い出すたびに、孔子の生き方とその後の評価の揺れを深く考えざるを得なかった。そして、「如何なる英雄も偉人もすべての時代を超越することはできない」という古人の箴言を心の裡で繰り返した。